
狐の娘

トーコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狐の娘

【Nコード】

N5774Q

【作者名】

トーコ

【あらすじ】

戦国時代、あるところに一人の娘がいた。

いたって普通の娘だが、一つだけ人と違うことがあった。

それは、未来を予知できる能力を持っていること。

ある日突然、娘は村を追われる。

特殊な才能を持った娘は、村を出てあてのない旅に出る。

和風ファンタジー

少女冒険もの

プロローグ（前書き）

「日本霊異記」

狐を妻として子を生ましむる縁 第二

昔、欽明天皇の頃、三野（美濃）国、大野郡の人が妻となるべき女を求めて馬を進めていた。

その時、広野の中で夫となるべき男を求めている美しい女に出会い、これを妻とした。

女は一人の男の子を生んだ。

十二月十五日に生まれたその家の犬の子は、いつもこの婦人に敵意をみせ、歯をむいて吠えかかった。

婦人が用事で碓屋に入ったとき、この犬の子は婦人にかみつこうとして追いかけて吠えかかった。

婦人は驚き恐れて本性を現し、野干（狐）となって垣の上に登っていた。

家長はこれを見て、『汝との間に子があるから吾は汝を忘れない。常に来て相寝よ。』と言った。

故に、夫の言葉に従いやつて来ては寝た。それ故、キツネとする。また、生まれた子の名をキツネと名付け、その子の姓を狐直と負わせた。三野の国、狐直の根本がこれである。

立命館アトリサーチセンター 「日本霊異記」の項より引用

<http://www.arc.pritsumei.ac.jp/artwiki/index.php/%E3%80%8C%E6%9C%AC%E9%9C%8A%E7%95%B0%E8%A8%98%E3%80%8D>（アクセス2011.2.9）

ブローグ

どくん。

さつきから心臓が激しく脈打っている。口から吐き出してしまいそうだ。

遠くから地鳴りのような低い音が聞こえてくる。耳を澄ますと、それは大勢の人々の怒号が混ざった音にも聞こえるし、飢えた獣の群れの唸り声のようにも聞こえた。

はるか前方、暗闇の中で赤い光がチラつくのが見える。そして、その光はうねりながら地鳴りのような音と共にどんどん大きくなっていく。

桐は、逃げなきゃと思うのに足がすくんで動かない。焦りばかりが募り、指先は冷え、のどはぎゅっとしぼられたようになって、声が出せなかった。

はやく。はやく。逃げなきゃ。みんなに伝えなきゃ。じゃないと手遅れになる……。

手遅れ？なにが？

はっとしてそう思った時、キリはいつの間にか目前にまで迫った、赤い光に全身を飲み込まれた。

予感

キリは、ふと顔を上げた。もう大分日は昇り、冬には珍しく空は晴れていて、久しぶりの青空が目にもぶしい。毎年この時期は冷えるが、今日は一段と冷え込む。自分の吐く息が白くふいこのように立ち上るのが見える。鼻の奥がツンと痛んだ。

今日は父さん、早く帰ってくるかしら。とキリは思った。キリの父、源九郎は猟師で、朝早くから獲物を捕りに出かけていた。ここ最近あまり獲物が取れなくて、毎日日が暮れてから遅くに帰ってくる。キリは知っていた。あまり頼れる人のいない自分の家は生活が苦しく、父が苦勞していることを。父は無口であり愚痴をこぼさないが、そういうことは黙っていても伝わってくる。

キリは家の周りの雪を掘っているところだった。雪かきは、キリの毎日の日課だ。これをさぼると、おちおち家から出ることもできない。特に昨夜の雪はひどくて、朝見たときはキリと父の家は半ば雪の中に埋もれていた。父がかんじきで苦勞しながら出かけていくのを、キリも手伝いながら見送った。父が出かけてからもう大分時間もたったので、雪かきはほぼ終わり、キリはぼんやり物思いにふけた。

最近嫌な夢を見る。内容は覚えていないが、まるで何かに急ぎ立てられるような、なにか恐ろしいものがすぐそばまで迫っているような、ざらりとした感触の夢だ。なにか良くないことが起きる予感がした。キリのこういう勘はよく当たる。よくもわるくも。幼い頃はそれほど大したことなかったが、ここ数年は特に頻繁に当たるようになった。なんだか、だんだん勘が鋭くなっていくようだ。キリは人と違う自分のことをずっと疑問に思っていた。(どうして、わたしは他人と違うのだろうか?どうして、他人にはわからないことが

分かってしまうのだろうか？どうして、髪も目の色も他人と違っているのだろうか？）そう、母のように。

母さん……。キリは、母のことを思った。母は特別だ。キリの母は、キリがまだ14歳だった一昨年の暮れ、肺を患って死んでしまった。キリの母は、名を和葉といって不思議な人で、どの村の出身とも知れず、ある日ふらりとあらわれて、源九郎と恋に落ちそのまま結婚してしまった。和葉の髪の毛は明るい栗色で、黒髪ばかりの村の中で目立っていた。和葉はおとなしい性格だったが、勘の鋭い人で、たまに予知のような言葉を口にして、それがよく当たった。村の者は和葉の予知を重宝する半面、彼女のことを気味悪がって避けていた。

キリは確実に母の血を引いていた。成長する度に、外見も特別な力も母に近づいていく。

幼い頃、キリは他人と違う自分が嫌だった。ある日、キリは何故母と自分はこんなに他人と違うのか、泣きながら母に尋ねたことがある。でも、和葉は困ったように微笑むだけだった。

「キリ、ごめんね、今はその質問に答えることができないの。キリがもっと大きくなって、お姉さんになったら話してあげる。だから今は我慢してね。いずれ必ず分かる時が来るから」

幼いキリは、まだ胸の中がもやもやしていたが、黙ってうなずいた。なぜなら、母の微笑みがとても悲しそうだったから。

和葉は寂しげな瞳をして、うなずくキリの頬に付いた涙を、やさしい白い手で拭ってくれた。

キリはそれ以来、ずっとその時のもやもやを胸に抱えて生きてきた。両親を悲しませたくなくて、母にも父にも吐き出せなかった。胸の底に澱のように溜まった疑問は、片時もキリから離れていかない。ある人物と一緒にいるときを除いて。

予感（後書き）

2011・2/9 加筆修正しました。

予感2

「キリー！」

明るい声が自分の名前を呼ぶのを聞いて、キリは物思いから覚めた。そして、キリの唯一の友人、ハルを認めると、一瞬驚いた顔をして、ぱつと顔中笑顔になって叫び返した。

「はるー！ いきなり、どうしたの？ 寒いでしょ。早く家に上がって」

ハルはにつこり笑って

「父さまがね。街に行ったお土産にお菓子を買ってきてくれたの。キリにもわけてあげようと思って。内緒だよ」

と言つて、また悪戯っぽく笑った。

「ありがとう」

キリはそう言いながらも、内心複雑な気持ちだった。ハルの父親はあまりキリをよく思っていない。むしろ、嫌っていると言つてもいいほどだ。お菓子は決して安いものではない。ハルの父はハルが可愛いからこそ、ハルに買ってきたのだろう。それがキリのような薄気味悪い娘に、大事な愛娘が貴重なお菓子をわけ与えていると知ったら、ハルの父はきつといい気がしないだろう。お菓子はうれしいが、キリのせいでハルの立場が悪くなるのは、耐えられなかった。

「さあ、入つて。待つててね、今お湯沸かすから」

キリはハルを家に招き入れると、囲炉裏の灰を掻いて火をおこし、薪を足して五徳の上にやかんを置いた。しん、と冷えた家に、熱が広がっていく。

「キリ。また何か気にしてるでしょ？」

腰をおろして、ハルはちよつと怒ったように言った。

「あのね、キリ。私が貰ったお菓子なのよ。どうするかは、私の勝手なの。私は、一人でお菓子を食べるより、キリと一緒に食べたほ

うがおいしいの。父さまだって、私がおいしくお菓子が食べられる方がいいに決まってるわ。ねえ、わかった？」

キリは苦笑してわかったと言い、ハルには敵わないと思った。

ハルはキリの気持ちなんてなんでもお見通しだ。キリはハルが友達で本当によかったと思った。

ハルは、きれいな黒髪にくりくりとした大きくて明るい瞳を持った少女だ。キリはハルとは対照的で、母譲りの栗色の髪に、切れ長で茶色く優しい瞳を持っている。キリとハルは、数えて同じ16歳だ。キリは自分だけ違う髪や目の色に劣等感を持っていて、ハルのことを羨ましく思っている。だが、ハルはキリとは逆に、キリの明るい栗色に憧れていることをキリは知らない。キリは、ハルにだけはなんでも話せた。そして、それはハルも同じようだった。二人は姉妹のように仲が良くて、キリはときどきハルと本当の姉妹だったらしいのと思う。

予感3

お湯が沸くまでの間、キリとハルは取りとめもないおしゃべりをした。

「あのね、キリ。サンゴロウさんのところ孫の、四朗ちゃんが風邪で寝込んでいるみたいなの」

「そう。それは心配だね……。この前も四朗ちゃんみたいなちいさい子が病気で亡くなったばかりなのに」

サンゴロウのところの四朗はまだ三歳になったばかりだ。まだ幼いうちに病気を得て、生き延びる確率は、そんなに高くない。貧しい村ではよくあることだった。この冬も、体力のない老人や、幼い子が病気で何人も黄泉の国に旅立ってしまった。村の情報には疎いキリだが、こうしてハルがたまに来ては教えてくれる。

お湯が沸いたので、それを二つの湯呑にいれ、軽く冷ましてから一方をハルに手渡した。ハルは、両手で湯呑をつつむように持って、白湯は温まるなあと言った。キリはそれを見て、ふわりと笑った。こつという時のハルは、とてもかわいいと思う。

キリはハルが持ってきてくれたお菓子の包みを開けた。

「わあ……」

キリは感嘆の声を漏らした。そこにはキリが見たこともないお菓子、白と桃色の小さい花みたいなお菓子があつた。

「これはね。落雁っていうの。お米の粉とお砂糖でできているの。とってもかわいいでしょ。キリに見せたくて」

予感 4

キリは、びっくりしてしまった。いくらなんでもこんな高級なお菓子だとは思っていなかった。こんなお菓子はきつとキリのような貧しい者には一生縁がないものだし、ハルだってそうそう口にできるものではないのだ。あらためて気おくれがして、ハルの方をちらっと伺うと、ムツとした顔のハルがいたので、キリは観念して素直に頂くことにした。

落雁を口に含むと、ぼろっと溶けて優しい甘さが口の中に広がった。

「ありがとう。ハル。なんてお礼言えいいのか。すごく嬉しい。ほんとにかわいくておいしいお菓子だね。わたし、こんなの初めて」「ううん。キリが喜んでくれてうれしい。どういたしまして……」

キリが幸せな気持ちになって言うと、ハルの顔にふと影がよぎった。いつも明るいハルの顔に影は似合わない。キリは不思議に思っ
て、ハルに尋ねた。

「どうしたの？ なんだかハルらしくないよ」

「あのね。わたし、弥生の月になったらお嫁に行くことになったの。その落雁はね、父さまが結婚のお祝いについて特別なの。だから、もうすぐキリとはお別れになってしまう」

キリは衝撃を受けた。ハルがお嫁に行くなんて、全然思ってもみなかった。でも、考えてみれば不思議じゃない。ハルは器量もいいし、家もキリと比べたらずっと立派で、もう16歳で年頃だ。キリと同じ16歳でも、キリとハルでは意味が違う。ハルは人並みに結婚して、子供を産み、幸せな家庭を築くだろう。ハルにならそれができるし、きつと難しいことじゃない。でも、除け者のキリは……。落雁の甘さの中に、かすかな苦さが混じった。

「ハル、よかったじゃない。おめでとう。お相手はどんな人なの？」

うつむいてハルは答えた。

「まだ、一回しか会ったことはないけれど、五歳年上で、優しくて真面目そうな人だった」

「そのどこが不満なの？ほんとうにおめでとう。ハルなら、笑いの絶えない素敵な家庭を作れるよ。自分のことのように嬉しい。どうしよう。なにかお祝いしなくちゃ。ごめんね。急な話だから、今なにもなくて」

キリはハルを元気づけるように言うと、がさごそと慌ただしくそこら辺を引つ掻きまわした。ハルはそんなキリを見てぷつと吹き出し、いつもみたいに明るい大きな声で笑った。キリもハルの笑い声に安心し、照れ笑いをした。

予感5

「ねえ、キリ。お祝いは今度でいいから、いつもの話を話してよ。わたし、キリの話大好き」

いつもの話とは、キリの力に関することだった。和葉が村人から畏れられ、また避けられるようになった原因である能力を、キリは母から受け継いでいる。亡くなる前に和葉は、キリに「特別な力」で見たり感じたこと決して他人には話してはいけないよ、と言った（かわいいキリ、いい子だから信用できる人以外には絶対に話さない、母さんと約束してちょうだい。いい子だから）

和葉は自分と同じ苦勞を、娘にもかけさせたくなかったのだろう。自分はもう取り返しがつかないし、もとより苦勞は覚悟の上で源九郎と結ばれたのだ。でも、娘は違う。娘に同じ思いはさせたくない。和葉は死の床で、娘に堅く誓わせたのだった。

キリは、母と約束したが春菜だけは例外だった。ハルは、キリの親友だし、信用できる。それに、キリ一人で抱え込むには重すぎる秘密だった。父の源九郎も信用できる人だが、苦勞している父にこれ以上負担を掛けたくなくて、キリは父に打ち明けられないでいた。ハルは、そんなキリの秘密の話を明るく受け止め、いちいち真面目に関心を持って聞いてくれる。

予感6

普段のキリならここで、夢で感じたことを、躊躇うことなくハルに話す。例えば、キリの感じたことが三日後に大きい嵐が来るとか、今年は豊作になるとか、そういうことなら全く問題は無い。だけど、今回の夢はいつもと様子が違った。目が覚めたとき、全身に鳥肌が立っていて、べたつく嫌な汗をびっしょりかいている。そして、いつまでも正体不明の嫌な予感が胸から去っていかない。(こういうとてつもなく嫌なことは、あまり人に話さない方がいい。例えば、ハルでも……) そうキリは思った。

だからキリは口ごもった。

「えっと、最近は何にも感じないの。ごめんね。面白い話ができなくて」

ハルは、全然気にした風もなく、明るい調子で答えた。

「いいのよ。そんな日もあるよね。いつもいつも何かあるなんて期待する方が間違っているよね」

キリは、ちくりと胸が痛むのを感じながら微笑み、話題をそらした。

「それより、ハル。お祝いは何がいい？私にできる精一杯のことをするから」

これはキリの真心からの言葉だった。大切な親友、ハルの晴れの舞台だ。心から祝福してあげたい。

「なんでもいいの。キリが私のためを思ってくれるなら。ねえ、お嫁に行ってもわたしのこと忘れないでね」

それは、明るくてさっぱりした性格のハルらしい言葉だった。

予感 7

ふと、窓の外を見ると、もう大分日が傾いてる。ずいぶん長く、話し込んでしまったようだ。冬の昼は短い。いったん日が傾き始めたら、日没までもういくらも残されていない。日が暮れてから、帰るのは危険だ。

「いけない！」

ハルは急いで帰る支度を始めた。キリはそんなハルを手伝い、慌ただしく見送る。

「じゃあね！キリ！」

そう言って、ハルは手を振りながら、速足で帰っていった。段々小さくなる背中を見送りながら、キリも小さく

「じゃあね。ハル……」

と呟いた。

ハルは忙しく足を動かしながら、今日のキリの様子について考えていた。今日のキリはなんだか変だった。初めは、自分の結婚の話のせいかと思ったが、どうもそれだけが原因ではないようだ。初めにキリの名前を呼んだ時も、なにか考え込んでいる様子だったし、力の話をした時も明らかに迷いの色が、あの優しいキリの目に浮かんでいた。

キリは何か私に隠しごとをしている。それも、キリの力に関係すること。

自分には、なんでも話してくれるキリが、自分に話せないこと。それは、よっぽどのことだ。他愛ないことなら、キリはわたしに話してくれる。なにか、大変なこと。そして、わたしに話しても、どうにもできないこと。優しいキリのことだから、わたしに重荷を背負わせたくないのだろう。

ハルはため息をついた。白い息が風に流される。（水臭いじゃない、わたしたち親友なのに……）自分にもキリと同じ力があつたら、キリは話してくれただろうか。

その時、ひと際強い風が吹いて来て、ハルの髪をびゅうつとなぶった。ハルは身震いして、襟元を掻き寄せ、より一層足早に帰って行った。

源九郎と和葉

その夜、源九郎は家に帰ると、なんだかぼうつとした顔で笠を編んでいる娘がいた。手は動かしているのだが、考え事をしているように、心ここにあらずといった様子だ。家の中は、ほわつと藁の匂いがして暖かい。

「ただいま」

源九郎が雪の匂いをさせて言うのと、キリは顔をあげてお帰りと言った。心なしか、ほつとした表情だ。

「今日はどうだった？」

キリが問うと、源九郎は担いできた二羽のうさぎを黙って示した。キリはお疲れ様と言い、微笑んだ。

源九郎がかんじきをはずして雪靴を脱いでいると、その間にキリは蓋をした鍋を囲炉裏にかけ、温め始めた。キリは帰りの遅い父のために、雑炊を作って温めるだけにしておいたのだ。

源九郎は土間からあがると、つま先を火のそばにあててよく揉み始めた。いくら防寒対策をしても、身体の隅の方はどうしても凍えてしまう。凍傷にならないように気をつけねばならない。しばらくそうしてつま先を暖めていると、じんわりと暖かさが沁みこんできた。

囲炉裏の鍋から湯気がたち始めると、キリはお椀に雑炊をよそり、箸を添えて源九郎に渡した。源九郎が雑炊をすすり始めると、キリはぼつりと言った。

源九郎と和葉2

「ねえ、父さん。ハルが結婚するんだって」

「そうか」

源九郎はそう言ったきり、また黙り込んでしまう。

ハルは、娘と仲のいい友達だ。なかなか人と打ち解けないキリだが、ハルには心を開いているようだ。そのハルが結婚するという。キリは、どんなに寂しいだろう。でも、優しい娘のことだから、きっと親友を祝ってやりたいに違いない。

「お祝いは、どうするんだ？」

源九郎は、雑炊をかき込み、ぼそつと聞いた。家計に余裕はないが、キリの親友が嫁入りするのだから、娘がその気なら自分にできる範囲で何でもしてやるつもりだ。

「父さん。そのことだけど、母さんの形見の簪をハルにあげたいと思うの。いいかな？」

源九郎は、ちよつと目を見開いたが、すぐに答えた。

「いいも何も。あれは、母さんがお前にくれたものだ。どうするかは、お前の好きにしろ」

「でも、父さん。あの簪は、母さんの思い出の品だよ。本当にいいの？」

源九郎は、なおも躊躇う娘に優しく言った。

「いいんだ。そのほうがきつと母さんも喜ぶ。簪がなくても母さんのことは思い出せる」

キリは、父親をじつと見つめた後、その言葉に嘘がないと分かって、ちよつとうつむいて目元をぬぐってから、ありがとうと言った。

源九郎と和葉3

源九郎は、和葉のことを思い出していた。贅沢は一切しない妻が、唯一持っていた装身具。それは、源九郎が和葉に贈ったものだ。黒い漆塗りの台に薄碧の翡翠が付いている玉簪で、簡素な造りだったが、上品な色合いで和葉の栗色の髪によく似合っていた。キリを身籠る前は、その簪を身につけた和葉とよく逢い引きをしたものだ。

キリの嫁入りときに、持たせてやりたかったと思って、源九郎は胸が痛んだ。キリだってもう年頃だ。嫁入りしてもおかしくない。なのに、キリは唯一の嫁入り道具を親友に渡そうとしている。それは、キリが自分には嫁の貰い手がないと諦めている証拠でもあった。キリは、妙な噂のついた自分が恋をすることなんかできないと思っている。

（自分たちのところに生まれてこなければ……）源九郎は、キリをかけがえのない大事な娘だと思っている。キリを天から授かったことに後悔はしていない。だが、自分と妻のことで娘にいらぬ苦勞を掛けていることも重々承知していた。

食べたお椀を片づけると、黙々と笠編みの作業を再開している娘に向かつて、おもむろに源九郎は語りかけた。

「父さんがな、母さんと出会って結婚するまでの話を、お前にしてやりたい。聞いてくれるか」

キリは、驚いて父の方を見た。今までそういった話を両親から聞くことはなかったし、なんとなく立入っていい話題ではない気がしていたのだ。それを父が自ら話し出すなんて意外な気がした。キリは黙ってうなずいた。

源九郎は、記憶の糸を少しずつ手繰り寄せるように、ぼつりぼつ

りと話し始めた。

源九郎と和葉4

俺の母さん、つまりお前のばあさんがな、亡くなった時、俺は落ち込んだ。俺はあの時19歳で、小さい頃から女手一つで俺を育ててくれたお前のばあさんに、やっと楽をさせてやれると思った矢先に、ばあさんはあの世に行ってしまったんだ。

そんな時、お前の母さんに出会った。

当時、俺は悩み事があると、よく山にある父さんだけのお氣に入りの場所に行った。そこは花がたくさん咲いている場所で、父さんはそこで考え事をするのが好きだった。ある日、いつもの様にそのお氣に入りの場所に行くと、花を見ている母さんがいたんだ。

母さんはな、それはそれは綺麗で、父さんはすぐ夢中になった。

父さん、勇気を振り絞って母さんに告白したんだ。母さんは、笑ってうなずいてくれたよ。（そうやって源九郎は照れたように頭を掻いた）

母さんと付き合うようになってしばらくして、父さんと母さんに関する嫌な噂が村に流れた。もちろん事実無根だったがな。それでも、その噂の影響は今も残っている。俺たちが村と距離をとっているのはそのせいだ。お前にも苦労をかけてすまないな（ここでキリは全然気にしてないというように首を振った）

それからまたしばらく経って、俺は母さんについて疑問を持った。仲良くなっても、母さんは父さんに自分のことは一切話してくれなかったんだ。家族や生い立ちというようなことだ。

ある日、母さんが帰る時忘れ物をした。俺は、それを持ってすぐ追いかけた。そしたら、信じられないことに、母さんの簪をくわえた狐がいたんだよ。母さんは狐だったんだ。母さんが「正体が知られたからには一緒にいられない」と言うのを俺は、必死で引きとめ

た。父さん、もうほとんど泣きそうだったよ。母さんがいなくなるのに耐えられなかったんだ。（キリは父の耳が赤くなっているのに気付いたが、なにも言わなかった）

そりゃあ、母さんが狐だとわかった時には驚いたけどな。でも、母さんは、父さんにとって、もうかけがえのない存在だったんだよ。もう父さんの一部になってしまっていたんだ。父さんはな、母さんが人間だから好きになったんじゃない。母さんが母さんだったから和葉が和葉だったから好きになったんだ。お前の母さんが和葉で、他に代わりがないのと同じように、父さんにも和葉の代わりはいなかった。だから、和葉が何者でも構わなかった。和葉が和葉でいさえいれば、他のことはどうでもよかった。

それより、俺には和葉がいなくなってしまうことの方が怖かった。お前の母さんがいなくなる苦しみは、俺の身の一部を無理やり引きちぎられるような苦しみだからな。とにかく、それくらい父さんは母さんに惚れていた。

母さんは、そんな俺の様子に呆れてほっとけないと思ったんだろうな。「どこにもいかない」と言ってくれた。

それからしばらくして俺たちはひっそりと結婚した。

俺と母さんが結婚したいきさつはそれだけだ。

源九郎と和葉4（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

源九郎と和葉は、大幅にエピソードを削りました。

そのうち、削った部分に手を加えて外伝として公表したいと思います。

源九郎と和葉5

父の話が終わって、キリは息をのんだ。まさか、母が狐だったとは……。それよりも、父にそんな意外な一面があつたなんて……。驚きすぎて、次の言葉が出てこない。

キリが黙っていると、家の中は沈黙が広がり、外の風の音がする。今夜も吹雪いているのだろう。ガタガタと戸がなった。

「母さんのこと、黙っていて悪かった。お前が一人前になつたら、言おうと思っていた。お前も、もう結婚してもおかしくない年齢だ。もう秘密を知ってもいい頃だろう」

「母さんはな、お前のことをとても心配していた。お前が自分のせいで、辛い目に会っくんじやないかと。お前、人にはない力があるだろう?」

おもむろに源九郎に問われて、キリは内心ぎくつとした。父には言っていなかったのに、父はお見通しだったのだ。

そんなキリを見て、源九郎は苦笑した。

「毎日一緒にいれば、お前のことくらい言わなくてもわかる。それに、母さんのこともあるしな」

そして、急に視線を鋭くすると、言った。

「お前は、母さんより勘が鋭い。どうしてそうなったのかは分からない。母さんは、まだお前が幼い時に言っていた。『この子の力はまだ大したことはないけれど、そのうちもっと強くなる予感がする。心配だわ』とな」

「お前、最近夢でうなされているだろう。この先、お前はその力とうまく付き合わなきゃならん。その力のせいで危ない目にもあうかもしれない。その力は便利なこともあるが、不便なことも多い。いいか、気をつけろよ。絶対に、油断するな」

キリは父の言葉に瞬いた。父の目は真剣だ。ふいにうなじの毛が逆立つのを感じた。心臓がときどきする。キリは、唾を飲み込むと、父と同じくらい真剣な瞳でうなずいた。

源九郎は、そんなキリの様子を見ると、ふっと肩の力を抜き、キリを安心させるように微笑んだ。

「いい子だ。色々聞かされて疲れただろう。今日はもう遅いからお休み」

＊＊

キリは、藁布団の中で父の話を反芻してみた。一度にたくさん話を聞かされて、まだ頭が混乱していたが、胸にすんなり入ってくる話もあった。

キリは、ずっと人と違う自分を疑問に思っていた。和葉が狐だったことは衝撃だったが、不思議と嫌ではなかった。

自分の母が狐だったのだから、もっと落ち込んでもいいはずなのに、全然嫌な気持ちにならないのが、キリは自分でもわからなかった。むしろ、長年胸の奥で燻ってきた疑問が解けて、妙にすっきりした気持ちだった。

自分が普通じゃないことは分かっていた。ただ理由を知らなかっただけだ。今日理由を知り、やっとはつきり自分を異端だと認めることができた。（わたしは、人じゃないんだ）そう思った瞬間、ハルの顔が思い出されて、胸が痛んだ。嫌ではないけれど、ひどく寂しい気持ちだった。

昔、キリが質問した時の悲しい母の瞳が思い出された。あの時、母は優しくキリの涙をぬぐってくれた。

色白だった母の顔。キリと同じ色の瞳。日にあたると、藁のように金色に輝いて見えた髪の毛。大好きだった母。

キリは源九郎のことも、和葉のことも好きだ。大切にキリを育て

てくれた二人を嫌いになれるはずがない。

キリが泣きながら尋ねたとき、和葉はどんなに寂しく辛い気持ちだっただろう……。父が言ったように、キリの母に代わりはいない。和葉だけが唯一無二の母なのだ。母がなんであろうと、和葉はキリの母親に違いない。そう思うと、胸の中の靄が少し晴れるような気がした。

（これからは、父さんの言うようにより一層気をつけなきゃいけない。わたしは狐の娘なのだから……）そんなことをつらつらと考えているうちに、キリは眠りについた。

警告

キリは暗闇の中にいた。いつものあの夢だ。

地鳴りのような音が聞こえてきて、キリは不気味な赤い光に包まれる。……と、いつもならそこで夢は終わるのだが、今回は様子が違った。まだ夢が続いている。

赤い光に包まれた後、いがらっぽい匂いがしてキリは目を開けた。暗かったのが、明るくなっている。目の前は奇妙に歪んでいて、よく見えない。まるで、水の中で目を開けて見た風景のようだった。

ハルの顔が見えた。横たわり、真っ赤な顔をして、苦しそうな息をしている。

「ハル！」

思わず叫んで、ハルの額に手を当てようとすると、霞か何かを触ったように手がすり抜けてしまった。何度試しても同じことだった。「ハル！わたしはここよ。一体どうしたの？ねえ聞こえる？」

声をかけても、ハルは聞こえていないのか、目も開けない。相当熱があるようで、ぜいぜいと喘いでいる。

すると、突然背後で話し声がした。振り返ると、ハルの母親と父親がいた。こちらにも、キリの姿が見えないようで、二人で何やら小声で話しこんでいる。

四朗……同じ……流行っている………疫病……助からない。声がくぐもっていてよく聞こえなかったが、断片的にそのような単語が聞き取れた。それだけで、何が起きているのかを、キリが理解するには十分だった。

ハルは、ひどい疫病に罹^{かか}っている。四朗と同じ病なのだろう。この冬流行っていた病はただの風邪じゃなかったのだ。体力のある若者の命も奪ってしまう、恐ろしい病だ。

そうキリが悟った瞬間、めまいと割れるような頭痛がした。立っていられなくなり、思わずしゃがみ込むと、雪崩のようにいくつもの映像が頭に流れ込んできた。疫病で苦しむ大勢の人々。キリが知っている顔もいくつかあった。それから、真つ赤な画面。倒壊した建物。鼓膜が破れそうに大きい地鳴りのような音。

後半になって行くほど、抽象的な像で早送りのようになっていった。地面が揺れているようで、吐き気がした。頭痛が耐えられないくらい強くなり、キリはなにもわからなくなった。

警告 2

翌朝、キリは早起きをして、出かける支度をした。父が出かけるのを見届けると、自分もすぐに家を出た。

動悸がおさまらない。ハルに夢で見たことを伝えなければ。もうすぐこの村中に疫病が蔓延する。それから、よくわからないけどもつと他に何か起きる予感もした。手遅れになる前に、早くハルに村を出るように伝えなければ。どこでもいい。この村から離れてさえいれば。

＊＊

ハルの家に着くと、例によつてハルの両親には嫌な顔をされたが、キリはそんなことにかまっていられなかった。ハルの姿が見当たらない。ハルはどこだろう。息せききつて「ハルはどこにいるのか」とハルの母親に詰め寄ったら、キリの迫力に押されたのか母親はしぶしぶ「今朝は具合が悪そうだったから、まだ寝ている」と言った。キリはそれを聞いて顔面蒼白になった。母親の制止も振り切つてキリはハルの家に入り込むと、ハルを探した。ハルの家は、キリの家と同じように雪国特有のがつしりとした造りで薄暗かったが、暖かくて心地が良かった。

ハルはすぐに見つかった。布団にくるまり横になっていたが、キリの姿を見ると驚いたように身を起こした。意外に元気そうで、顔色もそんなに悪くなかった。むしろ、ここまで息をつめてきたキリの方が、具合が悪そうにみえる。

「どうしたの？キリ、お祝いはそんなに急がなくていいのよ」

と言つて、ハルは笑った。冗談を言う余裕があるなら、大丈夫だ。「あのっハルが病気でっそれでわたし、知らせに来ようと思って…」

…っ」

キリの言葉は慌てていて要領を得なかったが、ハルは落ち着いてキリをなだめた。

「確かに今朝は少し具合が悪くて寝ていたけれど、そんなに大したことではないわ。それより、そんなに慌ててキリらしくないよ。落ち着いて、何があつたのか話してごらん」

キリは大きく深呼吸をして、気持ちを鎮めようとした。胸のざわめきは収まらないが、それでも幾分落ち着いて話しだすことができた。

キリは順番に説明した。最近、嫌な夢を見るようになったこと。そして、その嫌な予感はとても強かったこと。今までは、夢をみても内容はあまり覚えていなかったが、昨夜見た夢は違ったこと。その夢の中にハルが出てきたこと。色々な像が頭の中に流れ込んできたこと。

「いい？よく聞いて。夢の中で、ハルはひどい病に罹っていた。大人でも死ぬような病気よ。もうすぐ、この村で疫病がはやる。早くこの村を出たほうがいい。ハルが死ぬかもしれないのは、嫌だ」
「なに言ってるのよ。今朝はたまたま寝ていたけど、わたしはこの通り元気よ。わたしが死ぬわけじゃないでしょう…？」

ハルはキリの話を聞いても、それほど動揺しなかった。しかも動揺しないばかりか、話し終えても悲痛な顔色をしているキリを、安心させるように優しく微笑んでみせた。

「実は、キリが何か悩んでいることは知っていたの。きっとキリのいつもの勘のことだと、分かっていた。話してくれてありがとう。でもね」

ハルは急に強い色を、その黒い瞳に浮かべると続けた。

「わたしは、父さまと母さまを置いて村を出ていけない。春になって、嫁ぐまでこの村にいるわ」

「どうして！死ぬかもしれないのよ！わたし、ハルがそんなことに

なったら耐えられない。今まで辛いことがあっても、ハルがいたから頑張つてこれたの。お願いだから、この村を出てちょうだい。他の人がどうなっても、ハルだけは無事でいてほしいの」

納得せず震えながら反論するキリに、ハルは聞き分けのない子供を諭すように言った。

「わたしはこの村で生まれ育つたわ。この村の人々はキリに辛く当たってきたかもしれない。でもね、わたしもこの村の住人で、村人はみな親戚も同然なのよ。一人だけ、安全な場所に逃げるわけにはいかないの」

でも……と、なおも続けようとするキリを遮^{さへぎ}つて、ハルは「それにね。わたしは、まだ死ぬと決まったわけじゃないわ。勝手に人を殺さないで」

と、明るい瞳をくりつとさせて、笑った。

ハルはいつものハルだ。（ハルは、わたしよりずっと大人だ……）キリは、ハルに比べて幼い自分を恥じた。どうして、ハルはこんなに強いのだろう。わたしは、ハルを失うかもしれないと考えただけで、こんなに体が震えてどうしようもないのに。

でも、よく見ると、ハルは手を強く握り込んでいて、指先が白くなっていた。唇もかすかに震えている。そうだ、ハルだって怖くないはずはないのだ。それなのに、冗談を言つてキリを励ましてくれた。キリは、目のふちが熱くなるのを感じた。

キリは黙つてハルを抱きしめた。普段は明るく元気なハルだが、こうしてみると華奢でいかにも頼りない。着物越しにハルの体温が伝わってくる。

「わかった。わたし、自分のことばかり考えていた。ごめんね、ハル。一人だけ村を出るわけにはいかないよね。でも、やっぱり心配。身体には十分気をつけてね……」

キリが小さな声で囁くと、キリの耳の横でハルがうなずくのを感じ

じた。キリはハルから身体を離すと、おもむろに懷から小さな包みを取り出しハルに渡した。

「なんだかおかしい順番になってしまったけれど、あらためて婚約おめでとう。これ、古いものだけど、ハルに似合うと思うし、貰ってちょうだい」

ハルは、何だろうという様子で包みを開けて、翡翠の玉簪を見つけると目を剥いた。

「だめよ！こんなの貰えない！これはキリのお母さまの形見じゃない。とてもじゃないけど、受け取れないわ」

ハルが慌ててキリに簪を返そうとすると、キリはその手を簪ごと包んでハルの胸の前まで押し戻した。

「いいから。わたしの一番大事なものを一番大事なハルに持っていてほしいの。なんでもいいって言ったじゃない。これはわたしにできる精一杯のお祝いだよ。父さんも賛成してくれたわ」

「本当にいいの？」

とハルが言うと、キリはその日初めてキリらしい柔らかい笑顔を見せた。

警告3

キリが帰ると、その日一日ハルは物思いに耽っていた。掌で翡翠の簪を転がしながら、目は遠くを見つめるようで、何事か決めかねている様子だった。そして、考えがまとまっただろう、目に光が戻ると簪を握り込み、ハルはすつくと立ち上がって両親の姿を探した。

ハルの両親は、庭先で雪かきをしていた。ハルが出ていくと、作業の手を休めて訝しそうな表情をした。ハルの顔に緊張の色が見えたからだ。

「ハル、今朝のことはなんだったんだ？あの子と付き合うんじゃないと言っているだろう。あんないきなり押し掛けてきて、非常識な」
「父さま、キリは非常識じゃないし、いい子だわ。わたしの大切な友達よ。そんな風に言わないで」

ハルの父親は、渋い顔をした。キリのことは気に食わないが、かわいい一人娘には逆らえない。

「それでその顔は、なにか話があるのだろうか？なんの用だ？」

ハルはここで、唾を飲み込むと意を決して言った。

「父さま、サンゴロウさんのところの四朗ちゃんが、このところ寝込んでいるのは知っています？」

「ん、ああ。知っているがそれがどうした？」

ハルがこぶしを強く握り込むと、簪が掌に食い込んだ。

「四朗ちゃんは、普通の風邪じゃないかもしれない……。たとえば、疫病とか。ねえ、今年この村でひどい疫病がはやるかもしれない」

父親は、疑わしげに眉を上げて言った。

「なんでお前にそんなことが分かる？風邪で寝込む子供なら、毎年いる」

「それは……」

ハルが口ごもると

「どうせ、あの娘になにか吹き込まれたのだろうが、戯言だから信用するな。あの娘は母親に似て、おかしいところがあるからな。なあ、お前はもうすぐ嫁に行くんだ。お前にまで妙な噂がついたらどうする？あの連中とは手を切れ」

と、父親は幼い子供に説明するようにゆっくりした口調で言った。こんなことも分らないのかと言わんばかりだ。そして、その後はハルがいくら言っても全く取り合ってくれなかった。父親は諦めて母親の方を見ても、夫の言い分はもつともだというように、ハルを憐れみの目で見ただけだった。湿気を多く含んだ冷たい風が、三人の間を吹き抜けた。

（わたしには、なにもできないの？キリがせっかく警告してくれたのに……）ハルは唇を噛んだ。血の味がした。

＊＊

その日の深夜、ハルは高熱を出した。キリが夢で見た通りに、重い症状だった。翌朝、ハルの母親は、娘が熱にうなされているのを見つけると顔色を変えた。

もしかしたら、娘が昨日言っていたことは現実になるかもしれない。母親は急いで夫を起こし、娘の異変を知らせた。

はじめ、ハルの父親は風邪だろうと言って取り合わず、寝ていれば直ると言った。愛する娘が、疫病だとは考えたくなかった。しかし、三日経っても病気は治るばかりか、どんどんひどくなっていくようだった。そして、村の者にもハルと同じ症状で寝付く者が何人も出始めた。四朗はとうとう亡くなったとも聞いた。

彼は、動揺した。それから、キリが来てから娘の調子がおかしかったことを思い出し、きつとあの妙な小娘が自分の可愛い娘に何かしたのだと思いついた。そうだ、そうに違いない。あの家族は昔か

ら妙なところがある。得体のしれない母親にそっくりなあの小娘も、妙な技が使えたって不思議じゃないのだ。

彼は、源九郎のことも昔から嫌いだ。いきなりやって来たどこの馬の骨とも分らない女と結婚するなんて正気の沙汰じゃない。あの家族には狐憑きの噂もあるくらいだ。噂じゃ、狐憑きの家は周りの者を呪うという話だ。

彼は、どうしてもハルの病気をキリの一家のせいにしたかった。

あの時、娘のハルの話をきちんと聞いていれば、こんなことになっていなかったかもしれないとは考えたくなかった。全部がキリのせいだと考えると猛烈に腹が立って、奥歯を噛みしめるときりりという不吉な音がした。

獣の目

その日、いつものように朝早く出かけた源九郎は、なぜかすぐに息を切らせて帰ってきた。相当急いできたのだろ、顔は真っ赤で、冬だというのに汗にまみれていた。

キリは、そんな父の様子を見て不思議に思った。忘れものにしては焦りすぎだ。

「いいか！キリ、今すぐに荷物をまとめて逃げろ！早くしろ！時間がない」

いつもは無口で穏やかな父に似合わず、激しい口調で鬼気迫る勢いだった。キリが状況を把握できず、ぼーっと突っ立っていると、そんなキリに業を煮やしたのか源九郎は待ち切れず先に荷物をまとめながら怒鳴った。

「村で疫病が流行っている。死ぬ者も出てきたそうさ。村の者は、俺たちがなにかしたせいだと言って怒っている。はみ出し者で、妙な噂の絶えない俺達ならやりかねないとな。ようはなんでもいい。不満のぶつけどころがほしいんだ。あの様子じゃ、話も聞いてくれないし、容赦もしてくれないだろう。早くしないと村の連中がやって来て、俺たちは殺されかねない。だから、急げ！」

キリは父に怒鳴られると、びくんと肩を揺らし、自分も急いで荷物をまとめ始めた。（村で疫病が流行っている……夢で見た通りだ。ハルは大丈夫だろうか）キリは心配になったが、今確かめる術はなかった。必死で荷物をまとめている父に聞くのは憚られた。

かんじきと蓑をすぐ手に取れるところに置き、それぞれ竹筒の中に梅干しをいくつかと、味噌を入れた。それから、辛子の種子を油紙に包み、干し肉を出来るだけ用意した。急だったので、食糧はこのくらいだ。忘れずに小刀と火口箱（火をつける道具が入った箱）を荷物に入れ、出来るだけ着こみ、脚に藁をまきつけ、さらに温石おんしゃく

（温めた石、布などに包み懷に入れてカイロとして使った）を用意しようとしたとき、外から風に乗って人の声が聞こえてきた。

源九郎が外に様子を見に行くと、遠く木立の黒の間にまだ豆粒ほどにしか見えないが、村の男衆がただならぬ様子でこちらへ向かってくるのが見えた。皆、手に手に鎌や鍬など物騒なものを持っている。やわらかい新雪が積もったばかりで走ってはこないが、早く歩けないのはこちらも同じだ。

源九郎はさつと険しい顔つきになると、荷造りをしている最中のキリに途中まで用意できた荷物を持たせ、乱暴に外に引っ張り出した。

キリは、村人が向かってくるのを見て取ると、同時に胸を何かで刺し貫かれたような痛みを感じた。向かってくる男衆の先頭には、ハルの父親もいたからだ。ハルはどうしたのだろうか。いずれにせよ、顔が見えるくらい近くに村人たちは迫っていた。

キリは逃げようと山に向かって踵を返した。冬山をむやみに歩き回るのは危険だが、村人に捕まって殺されるよりはましだ。しかし、一向に父は歩き出そうとしない。

源九郎の顔は緊張しているが、口元はまっすぐにひき結ばれ、覚悟の色が見て取れた。

「キリ、時間がない。俺のことはいいから早く逃げなさい」

「そんなつ父さんも一緒に来るんじゃないの？だめよ。二人一緒にやなきや逃げない」

キリは源九郎に取りすがって、源九郎の身体を引っ張ったが、源九郎は頑として動かず巨大な岩のようだった。源九郎は、そんなキリを山の方へ突き飛ばすと、あつという間に村人の方へ行ってしまった。キリを突き飛ばす瞬間、源九郎の目には優しい光が浮かんでいた。

獣の目2

キリが声もなく見つめていると、源九郎は百歩ほど行つて立ち止まり、村人に呼びかけた。父と村人の間は十歩もなかった。

「そんな物騒なものを持ってなんの用だ？」

ハルの父親が叫んだ。

「村で疫病が流行っている！みんなお前らのせいだ。お前らを退治すれば、疫病もおさまるだろう」

ハルの父親の目は、血走っていて凶暴な感じだ。源九郎は、少々堅いが落ち着いた声音で言った。

「おいおい、冷静に考えてくれ。俺らにそんなことできるがわけないだろう。そんなことできるのは、神仏くらいだ」

「神仏だと……？ふん。疫病が何かの祟りのせいだとして、祟りの原因はこの村ではみ出し者のお前らに違いない。他の村人はまっとうな暮らしをしているからな」

「待てよ。俺らがまっとうな暮らしをしてないみたいな言い方だな。そもそも、我が家のせいだという証拠はどこにもないじゃないか」

源九郎の言葉を聞いて、ハルに父親の黒い瞳が不気味に光った。

口元を歪めて不吉に笑う。声が唸るように低い。

思わず源九郎は身を引きそうになったが、後ろの方にいるキリのことを考えて、腹にぐつと力を入れて堪えた。

「証拠ならあるさ。俺のこのハルはな、あの薄気味悪い小娘が来てから様子がおかしくなった。そして、村で疫病が流行るとか言い出し始めた。どうして、うちのハルにそんなことわかると思う……？それはそこにいる魔物に何か言われたに違いない。その小娘は、お前たち家族に冷たくした村に呪いをかけたんだ。うちの娘は優しくてな、村で除け者にされているその小娘みたいな奴にも優しく

していた。だが！そいつは俺の娘にも呪いをかけやがった。畜生。もし……ハルが死んでしまったらどうするんだ……？あの子はもうすぐ嫁に行くんだぞ……やっとなんかになるところだったのに」

そう言いながら、ハルの父親はゆっくり歩いてきた。源九郎に近づくと、どどんと声が高くなって、言い終えた時にはもうほとんど獣の唸り声のようだった。

源九郎が驚いて、ハルの父親の肩に両手を置き

「ハルが病気なのか？それは本当か？」

と聞いた瞬間、ハルの父親は持つてきた鎌を振り上げた。

「ほんとうだとも！それもこれもみんなお前らのせいだ！」

と絶叫し、源九郎めがけて鎌を振りおろした。

獣の目3

キリは前方で父の頸^{くび}から、赤いものが吹き上がるのを見た。冬の厚着にも関わらず、どんどん赤いものが服に広がっていく。雪に散った飛沫^{しぶき}が、彼岸花の色を連想させた。

父は声もなく、崩れた。すると、父の背中の方こうにいた父を手に掛けたモノの姿が見えた。その目は爛々と輝き、次の獲物を見据えていた。

キリはその獣の目に射抜かれた瞬間、全身を衝撃が突き抜け、金縛りのようになっていた体のこわばりが解けた。キリは急いで荷物を掴むと、脱兎のように駆けだした。

父の思いを無駄にするわけにはいかない。最後に見た父の目は優しい。鼻の奥が焦げる匂いがしたが、今は泣いている暇などない。

背後で男衆の怒声と、ざくざくと雪を踏みしめる音が聞こえた。

足元の雪はまだやわらかく、重い足枷となってキリの脚にまとわりついた。いつ追いつかれるかわからない。

うまく足を動かせないもどかしさがあつたが、キリは必死で前に進んだ。山に入れば、なんとか撒けるかもしれない。今は父が稼いでくれた距離が頼りだ。息が上がり、肺がヒリヒリと痛む。

キリの姿が山の木々の中に消えるのが見えても、村の男たちは雪に付いたキリの足跡をゆっくり追っていけばいいと、あまり急がずに歩いていた。

空はどんよりとした曇りで、半分ほど雪から頭を突き出した木々の黒と、青みがかかった雪の対比が印象的だ。その中に、キリが必死で通って行った跡が残っている。

少し離れたところにキリの姿が小さく見えた。白い息が風に流されていく……と思った瞬間、いきなりキリの姿が消えた。ものすごい地響きがして、もうもうと雪煙が上がる。雪崩だ。

キリが消えた辺りまで行くと、まだ流砂のように雪が流れていた。遠くからでは見えなかったが、そこは急に切り立った崖になっていた。崖の上に雪がせり出していて、崖に気づかないことはよくある。キリも気がつかず足を踏み外し、雪崩に巻き込まれたのだろう。崖下にはまだ雪煙が立ち込めていて、雪崩の激しさを思わせた。

男たちはたった今起こった出来事が信じられず、しばらく茫然としていた。しかし、誰かが

「これだけの雪崩に巻き込まれては助かるまい。魔物は山の神が罰してくださった。もう帰ろう」

と掠れた声で言くと、一瞬その場が白けた空気になったが、皆異論はないようでそのまま引き返すことにした。どちらにせよ、雪崩に巻き込まれて放置されれば、助かる者などいない。

その時、引き返していく男たちは気づかなかったが、一対の金色の目が遠くからその様子を見つめていた。

雪山にて

キリは意識を取り戻した。途中木に引つ掛かり、奇跡的に顔が外に出ていた。しかし、胸から下は重く冷たい雪に覆われ、どこもかしこも痛んで動かせない。息を吸うごとに背骨が軋み、胸に痛みが走った。しかし、取りあえずは生きている。

見上げると、自分が落ちたと思しき崖が6間（約11メートル）ほど上に見えた。我ながらあの高さから雪崩に巻き込まれて、よくこの程度で済んだものだ。本当に奇跡とは思えない。

ふと視界の端に茶色いものがかすめた。と思つたら、キリの背後から狐の顔がぬつと突き出し、キリの顔をべろつと舐めた。狐の舌は、生温かくてざらざらした。

キリが呆氣に取られて見てみると、狐はキリの胸元の雪を前足で掻きだした。この狐はほっそりとしていて小さく、狐の中でも小柄な方だった。赤茶けた毛皮の所々に雪の欠片が付いている。とがった鼻先にもたくさんの雪がくっついていた。

キリは狐のしようとしていることを悟って、狐に声をかけた。

「どうしてわたしを助けてくれるの？」

「別に……お前から狐の匂いがしたから」

狐の声（鳴き声と言うべきか）は、獣の姿に似合わず、人間で言うなら声変わりしたての少年のような声だった。ぶっきらぼうな口調だ。

「狐の匂いってどういうこと？」

キリは、喋るたびに痛む胸に顔をしかめながら聞いた。それにしても、狐の匂いとは何なのだろう。自分は獣くさいのだろうか……。狐の匂いは、狐の匂いだ。お前からは狐っぽい感じがする。だから助ける」

まったく答えになっていない。キリは氣を取り直して、別の質問

をすることにした。狐の雪を掘る速度は速く、もうキリの腹のあたりまで雪から掘り出している。残るは腰と足だけだ。

「わたしはキリ。ねえ、あなたの名前は何と言うの？」

「俺は千早だ。足が速いからそう呼ばれている」

答える狐は、ちよつと得意そうに尻尾を揺らした。

「チハヤ、助けてくれてありがとう」

キリがお礼を言うと、チハヤはますます得意気になって尻尾の揺れ方も激しくなった。しかし、はたと尻尾の揺れを止めて

「いや、まだだ。俺がお前を掘り出したところで、怪我をしていれば助けられないかもしれない」

と言った。

「怪我」という言葉を聞いた瞬間、キリは父のことを思い出した。閃光のようにあの時の光景が目の前に蘇る。父は、頸から沢山の血を流し、崩れるように倒れた。キリはそんな父を置いて逃げてきてしまった。父はあのあと……それ以上は考えたくなかった。息がうまくできず、胸が今までとは違う痛みで抉られるように痛い。

チハヤはキリの様子が変わったのに気付いたようで、またキリの顔をべろつと生温かい舌で舐めた。ざらざらする。

「どうしてそんな顔をする？このチハヤ様が助けてやろうというんだ。助からないわけがないだろう？見たとお前は大きな怪我もしていないし、大丈夫だ。俺は無駄なことはいしない主義なんだ。お前が死にそうなら、俺はもうとっくに見捨てている」

少々のがずれている上に見捨てるとはひどい言い草だが、チハヤがチハヤなりにキリを励まそうとしてくれているのを感じて、キリは無理をして微笑んだ。チハヤはそんなキリの様子を見て、少し不満そうに鼻を鳴らしたが、黙っていた。

雪山にて2

もうキリの身体はほとんど雪から掘り出されていた。チハヤはキリの身体全部が雪から出ると、キリの体中の匂いをふんふんと嗅いで「よし」と言った。それから、なにか気に食わないことでもあるように、尻尾をひと振りした。

「やっぱり、お前は大きな怪我をしていないようだ。俺の言った通りだ。でも、実はお前人間で、狐ではないのか？」

キリはびっくりした。自分が狐だとは一言も言っていない。キリの母親の和葉は確かに狐だと聞かされていたが、自分は生まれたときから人間以外のものになったことなどない。どうしてチハヤはそんな勘違いをしたのだろうか。

「俺はお前が人間どもに追われて逃げているのを見た。人間どもは魔物だなんだとお前のことを呼んでいた。そして、お前からは狐の匂いがした。俺はてっきりお前は狐なんだと思った。人間どもは気に食わないことがあると、狐のせいにするところがあるからな。もしそうなら、ひどい話だ。だから、助けたんだが……」

キリが「自分は狐じゃない」と否定すると、チハヤは耳をピンと立てて驚いた様子だった。

「じゃあなんで、お前は同じ人間から追われていた？ なにか悪さをしたのか？」

「違う！ わたしは何もしていない……。わたしはただ……」

キリは激しい勢いでチハヤの言葉を否定したが、そのあとは声が震えて言葉が続かなかった。（父さん……ハル……）キリは一気にこみ上げるものがあり、鼻の奥がツンと痛んだ。危うく鳴咽を漏らしそうになったが、なんとか堪えた。今泣いてしまっただけはもう立ち直れない気がする。拳を強く握り込んで、掌に爪が食い込んだ。

チハヤはキリの目に涙が盛り上がるのを見ると、なにか勘違いを

したのか慌てて言った。

「すまん！泣かせるつもりはなかったんだ。俺はお前が何かしたとは思っちゃいない。お前はそんな悪さをする奴には見えない。悪さをする奴なら、俺は助けない」

それからキリの様子を窺うように、キリの顔をすぐ下からそつと上目使いで覗き込んできた。温かい鼻息がキリの顔にかかる。

「それにしても、なぜお前からは狐の匂いがするのだろう？なにか心当たりはあるか？」

チハヤが不思議そうに言うと、キリは

「わたしの、母さんは、狐だった、そうよ」

と言った。今は一語一語言葉を区切つて話さなければ、心の中の感情を押し留める堤が決壊してしまいそうで、怖い。

キリの言葉を聞くと、チハヤの灰色がかった金色の目に納得した色が浮かんた。近くで見ると、チハヤの瞳は和葉の瞳の色によく似ていた。母の目の色はもう少し茶色味が強かったが、ちょうどこんな色をしていた。改めてキリは「自分は狐の娘なんだ」と自覚した。「そうか、それでお前からは狐の匂いがしたんだな。俺の鼻が鈍つたわけじゃなかったんだ」

チハヤは、もう一度キリの全身の匂いをふんふんと嗅いで確かめてから、笑った。狐が笑うのを見るのはなんだか変な感じがしたが、その笑顔はチハヤによく似合っていた。

＊＊

あのあとチハヤは、まだ動けないキリに向かって「ちょっと待ってろ」と言い、どこかに行ってしまった。

チハヤがいなくなると、急に心細く感じた。思い出したくないことも思い出されてくる。

キリは何も考えまいと空を見上げた。相変わらずの曇り空で、かすかに桜色の混じった鈍い灰色に輝いている。キリの身体が引つ掛か

った木は、しつとりと濡れてごつごつした木肌を光らせていた。キリはその命の恩人の木に寄りかかりながら、さらに周囲を観察した。もう日が暮れる頃なのだろう。雲は鈍い灰色から段々と明度を落とし紫がかった灰色になって、ぼんやりと雪が光って見える。キリが雪崩に巻き込まれた崖下は、あまり木が生えていなかった。キリが木に引っ掛かったのは、本当に幸運だったようだ。辺り一面が雪崩のかたい雪で覆われ、キリは改めて恐怖を感じた。自分はあと一歩で死ぬところだったのだ。

キリは急に寒さを感じた。痛みと緊張のせいで、キリは今まで寒さを意識していなかったのだ。しかし、今は凍死してしまいそうなほど寒い。今まで寒さを感じなかったのが、嘘のように思える。骨の芯から凍えていて、手足はまるで血の気がなく氷のようだ。凍傷になってしまったかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5774q/>

狐の娘

2011年2月10日19時55分発行